

「新聞学科」に寄せて

大島 晃（上智大学文学部長）

新聞学科創立七十五周年を迎えるとき、学科及び専攻の現状と将来の在り方に、学内外の関係者からあらためて多くの評価と提言が寄せられたことかと思う。この平成の大学改革も後半戦に入っているが、日本の學術の枠組み・意識そのものを根本から問い直し、再構築する作業が続いている。ただその改変の取組みが所謂大学全入時代を迎え、学生獲得を意図した看板の書替えと思われる例も少なくない。つまるところ教育研究の基盤そのものを自己破壊することに繋がる。とりわけ継続の中で新たな体制を構築する上で、それは厳に戒めなければならない。

「新聞」という名称は、中国古典に関わる私にとって漢語である。それも古典語の意味を重ねて理解する。とくに精査したわけではないが、院生のとき研究室の書架で『宋代新聞史』を手にしたのを記憶する。以来、宋明の諸書を通じて時にこの語に出会うことがあるが、辞書的には三つの意味で整理される。(1)、新しく耳にしたこと。社会で新たに発生した事から。(2)、新しい知識。(3)、朝報（官報）にまつわる情報、情報語。(3)は日々出される官報にかかわる政府機関、諸官庁の情報のことであるが、漏泄の禁に触れる面があるから、それを慮って新聞と呼んだという。「新聞」の漢語が有していたこの三つの意味は、今日「新聞」の名称に込める最も基本的な要素のように、私には思われる。宋代は出版という媒体が発展した時代であるが、メディアが多種多様になってきても、「新聞」の語が担ってきた本質は古くて新しいことではないかと、門外漢ながら考える。

二十五年前、新聞学科創立五十周年において、二十五年後の今日をどのように展望しかつ実際に歩んできたのか、今日の地位を築いてきた先輩諸氏ともども、このシンポジウムを機に検証できるのは何よりのことと深謝したい。そして、学科・専攻の歴史・伝統・風土の独自性を再評価し、それを優位なものとして発展させていくために、次の二十五年後の姿を見すえた取組みを心より期待したい。